

日本人街

金 泉碧

昼下りのかげろうの上り立つ静けさの中

私は一人で歩いている

息を吸い込むと胸の入り口が

熱気で塞がる 亜熱帯の空の下

両側に連なる 低い軒のアーケード

水色のペンキの剥げた かつての日本人街

狭い間口の家の奥

靴を脱いで階段を上ってゆく

見えてくる居間の真ん中に

黒々と艶のある仏壇が

ご先祖様は一族の日々の営みを

一部始終見守っている

床板のひんやりとした冷たさに

一息ついて籐椅子にもたれ

じつとりと肌にしみ出た汗を拭く

窓のない薄暗い居間には

祭壇の黄色い燈明 壁に貼った赤いお札

うず高く積まれた南国の果物の供え物

長い線香のかおりと煙に包み込まれ

思わず目をつぶる

奥の低い窓のある畳の部屋で

外を歩きかう人々を眺める

昔はきつと日本人が我が物顔で歩いてた
半分しか開かなくなった窓からは

もうその姿は見られない

軋んだ窓から入って来る湿気と人いきれが

もう戻らない時代を呼び起こす

透き通った青空の

亜熱帯の太陽が ジリジリと照りつけて

私をどうしようもなく消耗させる